武蔵野日曜聖書講筵

愛の帯
――コロサイ書第3章――

１９９２年６月14日
小池辰雄

神族天国人　天の父の慈悲なるが如く　主の汝らを恕し給える如く　愛は全きの帯　キリストと一つに　言は霊にして生命　感ずるのが大事　愛は一切に勝つ　愛の帯　愛のつな

【コロサイ3】

1 汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリスト彼処に在りて神の右に坐し給うなり。2 汝ら上にあるものを念い、地に在るものを念うな、3 汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。4 我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。

5 されば地にある肢体、すなわち淫行・汚穢・情慾・悪慾・また慳貪を殺せ、慳貪は偶像崇拝なり。6 神の怒は、これらの事によりて不従順の子らに来るなり。7 汝らもかかる人の中に日を送りし時は、これらの悪しき事に歩めり。8 されど今は凡て此等のこと及び怒・憤恚・悪意を棄て、譏と恥ずべき言とを汝らの口より棄てよ。9 互いに虚言を言うな、汝らは既に旧き人とその行為とを脱ぎて、10 新しき人を著たればなり。この新しき人は、これを造り給いしものの像に循い、いよいよ新になりて知識に至るなり。11 かくてギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼、あるいは夷狄、スクテヤ人・奴隷・自主の別ある事なし、それキリストは万の物なり、万のものの中にあり。

12 この故に汝らは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の心・仁慈・謙遜・柔和・寛容を著よ。13 また互に忍びあい、若し人に責むべき事あらば互に恕せ、主の汝らを恕し給える如く汝らも然すべし。14 凡て此等のものの上に愛を加えよ、愛は徳を全うする帯なり。15 キリストの平和をして汝らの心を掌どらしめよ、汝らの召されて一体となりたるは、これが為なり、汝ら感謝の心を懐け。16 キリストの言をして豊かに汝らの衷に住ましめ、凡ての智慧によりて、詩と讃美と霊の歌とをもて、互に教え、互に訓戒し、恩恵に感じて心のうちに神を讃美せよ。17 また為す所の凡ての事ある

いは言あるいは行為みな主イエスの名に頼りて為し、彼によりて父なる神に感謝せよ。

18**妻たる者よ、その夫に服え、これ主にある者のなすべき事なり。**19**夫たる者よ、その妻を愛せよ、苦をもて之を待うな。**20**子たる者よ、凡ての事みな両親に順え、これ主の喜びたもう所なり。**21**父たる者よ、汝らの子供を怒らすな、或は落胆することあらん。**22**僕たる者よ、凡ての事みな肉につける主人にしたがえ、人を喜ばする者の如く、ただ眼の前の事のみを勤めず、主を畏れ、真心をもて従え。**23**汝ら何事をなすにも人に事うる如くせず、主に事うる如く心より行え。**24**汝らは主より報として嗣業を受くることを知ればなり。汝らは主キリストに事うる者なり。**25**不義を行う者はその不義の報を受けん、主は偏り視給うことなし。**

●神族天国人

召団讃歌Ａ10「汝れわがうちに」の第４節の、

「汝れは愛なり　愛の炎ぞ
　御霊の愛を　貫き生きよ」

これを本当に実践したのが賀川豊彦です。愛したというよりも、彼自身が本当に愛そのものです。大変な人です。無教会にはあれだけの人はいません。私は、賀川さんのものはもっと読まなければいかん、と思った。非常に文才もあるし、『一粒の麦』という小説も読みましたが、賀川さんのものは体験から出ているので、ひねり出したものではない。

パウロが本当にまた愛の権化で、「信交の使徒パウロ」と言われるけれども、これくらい行き届いた人はちょっとない。パウロの手紙を見ると本当に驚く。

12**この故に汝らは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の心・仁慈・謙遜・柔和・寛容を著よ。**

「この故に汝らは神の選民である」

と、私たちも正にキリストによって神の選民であります。イスラエルの民が選民というわけではない。歴史的にはイスラエルの民は選民といっていいけれども、選民らしくないところがある。ユダヤ教はあいかわずキリストを受けとらない。

「彼らが本当にキリストを受けとる時には、歴史の終りだ」

と、パウロがロマ書の終りの方で預言している。

「聖なる者また愛せらるる者なれば」

聖なる者というのは神さまの神族となったということです。我々は神族なんです。別な言葉でいうと、天国人ということ。我々は地上にありながら、天国人である。

「だから、間違いは起こさない」

という意味ではない。お互いさま、間違いだらけだ。いいんだよ、そんなことは、気にしなくて。ただ、いつもその中心に知らぬ間に帰っていく。本質的に、第二の本質という――古いものが全然なくなるわけではない。人間の性格というものはなかなか変わるものではないけれども、そんなことを気にしていたら、いつまでも始まらない――その奥の大事なものが、それに勝っていく。自分で分かる。立ち上がらざるを得ないし、立ち上がる力を戴いているから、それは心配要らない。そのようにして、段々、彼岸的な人にみんな鍛えられていく。人には長短があるさ。長短をそれぞれ問題にしたってしょうがない。

●天の父の慈悲なるが如く

「慈悲の心・仁慈・謙遜・柔和・寛容を著よ」

と、一番先に「慈悲の心」と書いてある。

「幸いなるかな、憐れみある者」

とキリストが言われた、あれです。

「天の父の全きが如く、汝らも全かれ」

という。ルカ伝では、

「天の父の慈悲なるが如く、汝らも慈悲なれ」

という。「憐れみを持つ」ということです。愛する憐れみを持つということは、憐れみの行為をしなければ、憐れみを持つということは言えない。単なる同情ではダメだ。

「相手の立場に自分を落として、その人を助け救い上げる」

というのが本当の愛するということだから。自分はお高くとまっているのではない。慈悲というのはそうわけだ。

「仁慈（なさけ）」、なかなか漢字というものは趣きがある。「謙遜」、平伏しのことです。「柔和」、これもキリストの山上の告白にある。

「柔和なるもの、地を継がん」

という。「寛容」、大きく容れる。裁かない。こういう言葉は、パウロの書簡のガラテヤ書のところにも大体出ていたね。

「22然ど御霊の果は愛・喜悦（よろこび）・平和・寛容・仁慈・善良・忠信・23柔和・節制なり。……」（ガラテヤ5・22～23）

「聖霊が来ると、その果は愛・喜悦・平安・寛容・仁慈・善良・忠信・柔和・節制なり」

と、やはり同じような言葉が出ている。それでこれはパウロの言葉であるということが分かる。これは聖霊の果（み）だという。正にその通りです。「聖霊」という言葉が躓きになる。ただ聖いと思ってね。そうじゃない。

「キリストの霊」

といえばいい。キリストは、みんなこういうものは有るんだから。

こういうパウロの言葉を読んで、楽しくならなければダメですよ、皆さん。

「私には果たしてそうなれるか？」

なんて、そんな疑問は要らん。

「うれしいな」

と言って受けとる。

●主の汝らを恕し給える如く

13 **また互に忍びあい、若し人に責むべき事あらば互に恕(ゆる)せ、主の汝らを恕し給える如く汝らも然すべし。**

これは大事なことです。これがなかなかできないので、いつまで経っても根に持っている人がある。いつまで経っても根に持っている人は、これはサタンだよ。サラサラと流していかないと、相手も自分も救われない。みんな人間は躓いたり転んだり、間違ったことをやったり言ったりするんだよ、そんなことを一々気にしていたらしょうがない。乗り越えていかなければ。パウロが言っている、

「主の汝らを恕(ゆる)し給える如く汝らも然すべし」

というのは強い言葉です。キリストの恕(ゆる)しはもう徹底的な赦(ゆる)しですから、十字架の赦しは。

「彼らを赦してやってください！」

という。自分が殺されながら、相手を敵を赦しているんだから、これ以上の赦しはない。その赦しを受けないでいると、これは自分が地獄に入る。受けない人は、それをいつまでも根にもっている人は地獄に入る。

私の所から、いろいろな意味で出て行った人がある。

「いつでも来なさい。私はなんにも昔のことなんか思ってないんだから」

と、私は言っているんだ。何を考えているんだろうね、全く。本当にキリストの十字架を受けとっていないから、みんなそういうことになる。十字架を徹底的に受けとれば、互いにゆるせる。

内村先生も随分、圭角――圭角というのは角のあること――のある人だったから、内村先生と調子の悪くなかった人はなかったんじゃないかな。それくらい、あれこれいろんなことがあった。けれども、十字架の下でもって、みんな和解した。そこが、無教会のいいところです。十字架の下で互いに赦しあった。それは「十字架の赦し」というのは絶対的なものだから。

「十字架、十字架」

と言いながら、十字架の赦しを受けとっていて、人が許せないなんていうのは、本当は十字架を受けとってない。そういうことになる。いわんや、そこに聖霊の愛があるんだから、

赦すどころでない、愛してやる。「赦す」という言葉よりも「愛する」という方がもうひとつ上の言葉ですから。

昔の手紙や葉書をひっくり返して見るというと、私は懐かしく思うんだ。

「どうして、この人たちが行ってしまったんだろうな」

と思う。私は全部とってあるから。嫌やな葉書や手紙なんかありはしない。楽しいんだ、みんな。おかしなもんだね、この人生というものは。何こだわっているんだろうね。気の毒になるんだ、正直。

●愛は全きの帯

パウロが言っている。

14 **凡て此等のものの上に愛を加えよ、愛は徳を全うする帯なり。**

十字架で赦されたから、

「愛を加えよ」

なんて言わなくたって、キリストの赦しは本当に徹底的な愛だから、愛はその上に加わらざるを得ない。

「愛は徳を全うする帯なり」

この言葉が今日の中心です。「徳」という言葉はない。ギリシア語では、

「愛は全きの帯なり」

という。

「愛は完全性の帯だ」

と。

15 **キリストの平和をして汝らの心を掌（つかさ）どらしめよ、汝らの召されて一体となりたるは、これが為なり、汝ら感謝の心を懐（いだ）け。**

「キリストの平安をして汝らの心を掌どらしめ」

と。神さまとキリストとの関係は平安の関係ですから。平安は生命、力がある。安息日というのは、私たちは復活のキリストの中に安息するので、日曜日は力を、生命を、光を、愛を――お互いさま語るも聞くも同じこと――受けとる。

「そのために、日曜日は大事だよ」

というのは、そのことなんです。一週間の原動力になる。それを日本人は、日曜をどんな暮らし方をしているんだか知らんけれども。

集会はお説教なんかしているんじゃない。キリストを受けとるために、我々は集会をしている。身体の調子が少し悪くても、ここに来て集会をしていれば、知らない間に治ってしまうんだ、私が按手しなくたって。本当の元気というのはキリストから来る。元の気なんだから。

「元気を出せ」

と言ったって、自分で出そうとした元気なんて空元気だよ。元気なんか出す必要はない。

「元気は自ずから流れます、迸ります、泉のように」

と。そういう境地になってください。私は語りながら、もう、そういう境地にいるから、告白しているだけのはなしだ。

祈りのときに、

「主さま！」

と一言、言うでしょ。もうそれで、その一言で私は平安の中に入ってしまう。ただ、キリストを呼んでいるのではないんだ。呼ぶと同時に自分を投げ入れているから、「主さま」という言葉と共に。そういう祈りを、あなた方、夜静かな時でも朝でも、しなさいよ。キリストと一つとなってごらん。空を飛ぶようなことになってしまうから。鳥にならなくても、鳥よりも凄く翔んでしまう。

●キリストと一つに

15 **キリストの平和をして汝らの心を掌どらしめよ、汝らの召されて一体となりたるは、これが為なり、汝ら感謝の心を懐け。**

キリストと一つになる。キリストは首、我々はその体。エクレシア、召団はキリストの体です。そういう言葉が形容詞ではダメです、現実でなければ。脈々としてキリストの血が、生命が通っていなければ。

「『感謝の心を懐け』なんて言われなくたって、感謝してますよ」

と、パウロさんに言ってやれ。パウロが「何々せよ」とか「何々するな」とか言ったって、それをいわゆる道徳的な律法と思ったらダメです。

「そうできますね、感謝してますね」

と、そういうように読まなくてはいかんですよ、この聖書というものは。いわゆる道徳にしてしまうと、固苦しくなる。福音はそんな固苦しい世界ではない。律法から解放されて、知らない間に律法を全うする世界だ。それがこの新約の素晴らしさなんだ。ところが、ユダヤ人は相変わらず律法の世界にいる、

「すべし、すべからず」

の律法の世界に。律法が悪い、というんじゃない。

その「道」は自ずから自分自身が道となる。

「我は道なり」

と言う。キリストを受けとると、その道が自ずから歩けるようになってしまう。それでも人間はダメだから、躓いたり転んだりする。いいよ、躓いても転んでも。必ず起き上がって前進するから。

●言は霊にして生命

16 **キリストの言をして豊かに汝らの衷（うち）に住ましめ、凡ての智慧によりて、詩と讃美と霊の歌とをもて、互に教え、互に訓戒し、恩恵（めぐみ）に感じて心のうちに神を讃美せよ。**

「キリストの言をして豊かに汝らの衷に住ましめ」正に「住まわしめ」です。

「我が言は霊なり、生命なり」

と言われるでしょ。キリストの言は意味ではないんだから。霊にして生命なる言を、それを住まわせると、こちらが霊にして生命になる。

「汝らは既に潔し、わが言を聞きたるによりてなり」

なんて、キリストは言っているんだから。聞くというのは本当に生命の、身体の一部分みたいに受けとることが、聞くなんです。だから、

「我を食べよ、我を飲め」

なんて、キリストはあんなことを言う。本当に生命の世界です。これを何回私は言うか分からないけれども、説明ではないんだ。

「そうです、私もだいぶそうなっています」

と、そう答える。あなた方、何も言わなくたって、そうでしょ。

「凡ての智慧によりて」

と、「すべて」なんて、そんなものにこだわらなくたっていいですよ。「すべて」なんて、できっこないんだから。

「互に教え」

なんて、人に教えるという意識はよくない。私はあなた方にひとつも教えてないんだ、ただ語っているだけだ。学校では、先生が生徒に教えるということは、教師なんていってやるけれども、しかし、それも本当は語りなんだ。教育なんていうのは、本当はあまりいい言葉ではない。だから、今度は、

「語ったものを、私は受けとりました。身体で受けとりました」

と。「分かりました」ではない。

「受けとりました」

と言う。それが本当の教育なんだ。何しろ、旧来の古い概念を乗り越えなければいつまでたってもダメなんです。

「互いに教え合って」ではなく、

「互いに語り合って」

だ。「互いに訓戒し」だって？　戒めるのか。

「そんな事はよせ。こうしろ」

とか、まぁそれは言ったっていいよ。いいけれども、それは愛をもって語ってないと、お互いに変なことになる。だから、いかなる表現も、根底の質は、愛でなければダメなんです。

「詩と讃美」とは、旧約の詩篇が思われて言っているんでしょう、「旧約の詩篇のように」と。けれども、詩篇を読んで、ちょっと足りないと思うのは、詩篇の中には「愛」という言葉が割合と少ない。そこがやっぱり旧約の限界だ。しかし、預言者は凄いよ。

●感ずるのが大事

「恩恵（めぐみ）に感じて心のうちに神を讃美せよ」

と。感ずるのが大事です。「感ずる」ということは非常に大事なことで、「分かる」ではダメです、感じなくては。感入しなくては、体感しなくては。体（からだ）で感ずる。本来的に感ずること。真理を体感して展開していたのが、大詩人ゲーテです。ゲーテが、この感ずるという世界を非常に受けとっていた。

「頭で分かったり分析したり、そんなことはダメだ。ドイツ人はなぜこんなに理屈っぽいのか。ダメだよ、そんなに理屈っぽくては」

と、ゲーテ自身が嘆いている。。だから、ゲーテは

「体感が一切である」（ゲフュール　イスト　アッレス）

と、そういう言葉が『ファウスト』の中にあります。「ゲフュール」を「体感」と訳すのは、おそらく私一人でしょうね。感情だとか、情感と訳している。そうではないんだ。「ゲフュール」の「ゲ」というのは、総体的なときに「ゲ」というのが付くんです。ゲーテは、文字通り、

「一切を身体で感じとる、それが一切である」

と言った。そうすると、今度は、

「行為が一切である」（タート　イスト　アッレス）

と言っている。

「本当に体感すると、それは行為に展開していく」

ということです。そういうことをバリバリ言えるような文豪が日本にはいない。ゲーテはやっぱり、「神・大自然」というものを全部体感しているから。『ヴェルテルの悩み』という有名なゲーテの処女作があるでしょ。あれでもって彼はすぐ世界的になってしまった。あの中の「五月十日」のところを見ると、素晴らしい言葉がある。野原に行って本当に大自然と一つとなって喜んでいる。あそこに全ゲーテの胚種が、本質が現れている。あなた方、第一流のものを読みなさいよ。

「恩恵に感じて心のうちに神を讃美せよ。キリストの恩恵に体感して、心の中に神を讃美せよ」

と。「讃美しますよ、讃美してますよ」とパウロに言ってやれ。

17**また為す所の凡ての事あるいは言あるいは行為みな主イエスの名に頼(よ)りて為し、彼によりて父なる神に感謝せよ。**

主イエスの「名によりて」ではない、「名にあって」です。

「エン　オノマティ　クュリュー　イエースー」（主イエスの名にあって）

と書いてある。

「名の中で、名に在って一切を為す。言動は一切、キリストの名にあって為(せ)よ」ということ。キリストの名が凄いんだから。パウロもペテロもキリストの名を呼んで、たちまち相手を治してしまった。生まれつきの跛者を立たせたり。大変な現実です。とにかく、質的にそういうところに来なかったら、つまらんです。

聖書の言葉の奥からの響きを食らいなさいよ。讃美歌を本当に魂をもって歌っていると、その歌声を聞いていながら、こっちに生命がくる。だから、こっちは歌わないで、聞いているんだ。（笑）

讃美歌でも、「…したまわん」なんていうと、私は生命が抜けてしまうから、「…したもう」と変えて歌う。「たまわん」ではない、「たもう」だ。

「キリストはかく為(し)たもう」

と、現実として受けとる。

●愛は一切に勝つ

次の言葉は、よく結婚式で読むところだ。

18**妻たる者よ、その夫に服(したが)え、これ主にある者のなすべき事なり。**

それはまぁ、原則としては、そうです。けれども、頑固なワンマンな夫にそう従うわけにはいかんさ。いろいろな場合がある。

19**夫たる者よ、その妻を愛せよ、苦(にがさ)をもて之を待(あしら)うな。**20**子たる者よ、凡ての事みな両親(ふたおや)に順(したが)え、これ主の喜びたもう所なり。**

なかなかこの頃は従わないようだけれども。それは、子供が本当に従順だと、親は、

「お父さんは少し無理なことを言ったが、俺は悪かった」

と、後から改めるよ。相手を後から改めさせるような在り方がいいんです。すぐ喧嘩したらダメなんだ。

「それでも、こうだ」

なんて言って、すぐやったら、それはダメだ。忍従という、忍び従うということ。

21**父たる者よ、汝らの子供を怒らすな、或は落胆(きおち)することあらん。**22**僕たる者よ、凡ての事みな肉につける主人にしたがえ、人を喜ばする者の如く、ただ眼の前の事のみを勤めず、主を畏(おそ)れ、真心をもて従え。**

キリストは神さまの僕。神さまの言うことを絶対に受けとって動いていた。これが僕の

本当の姿です。けれども、相手が人間で、しょうがない主人がいるから、それに従っていたら、やり切れない場合もあるでしょう。しかし、言うべきことは言わなくてはならない場合がもちろんある。そんなことは一々、私は説明するのは面倒くさいから、止めますけれども。要するに、従うのでも、聞くのでも、全部こちらが愛をもっていると、勝つんです。

「愛は一切に勝つ」（アモール　オムニア　ヴィンキット）

ヒルティーの大好きな言葉です。彼の墓碑名にこれが書いてある。とにかく、愛は、これだけは一番強い。終いに相手が参ってしまう。

十字架で我々を完全に赦し罪を贖って、しかも今度は、聖霊をくだしたのだから、キリストの恵みというのは大変なもんだ。これ以上の恩恵はない。その聖霊を

「要りません」

なんて言ったら、しょうがないよ。

23 汝ら何事をなすにも人に事うる如くせず、主に事うる如く心より行え。

「主は知りたもう」

と。だから、無理も忍ぶ。そして、相手に主の愛で仕えて対すると、その時、どういうようにするかは自然に示されます。キリストの愛がなかったら、それはダメなんです。決して、相手を裁かない。

24 汝らは主より報として嗣業を受くることを知ればなり。汝らは主キリストに事うる者なり。25 不義を行う者はその不義の報を受けん、主は偏り視給うことなし。

根底的には、根源的には、何をしてても、キリストに仕えている、神に仕えている。「仕える」という言葉は非常に皆嫌がる。今の自由だとか、自主だとかいうと、

「仕えるなんていうのはどうも気にくわない」

と。そうじゃないよ。相手はキリストだから、キリストに従っていることが、本当の「自由」なんです。自分にとらわれてないから。いわゆる自由は自分に囚われている。我に囚われた自由はひとつも自由でない。勝手気儘というやつだ。

日本の政治家には一流の人物がいない。嫌になってしまうよ。結局、この大真理を、生命の真理を受けとってないから。西郷南洲が、

「敬天愛人」

と言ったのは正にこれは至言です。「天」は、「神」と言おうが、何と言おうが同じことです。

「本当の敬天をしていれば、人を愛せざるを得ない」

ということです。そうでなければ、本当の「敬天」ではない。そういうことは大学の先生たちも、中学・高等学校の先生たちも、どうもはっきり受けとってないと見える。情けないね。何が教育だと言いたくなる。

●愛の帯

「愛の帯」。旧約聖書のエレミヤ書13章を開いてください。

「1エホバかくいいたまえり 汝ゆきて麻の帯をかい 汝の腰にむすべ 水に入る勿れ。2われすなわちエホバの言に遵い帯をかいてわが腰にむすべり。3エホバの言ふたたび我にのぞみて云う。4汝が買いて腰にむすべる帯を取り 起ちてユフラテにゆき 彼処にてこれを磐の穴にかくせと。5ここに於てわれエホバの命じたまいし如く往きて これをユフラテの涯にかくせり。6おおくの日を経しのち エホバ我にいいたまいけるは 起てユフラテにゆき わが汝に命じて彼処にかくさしめし帯を取れと。7われすなわちユフラテにゆき 帯を我隠せしところより掘取りしに その帯は朽ちて用うるにたえず。8またエホバの言われにのぞみて云う。9エホバかくいう 我かくの如くユダの驕傲とエルサレムの大なる驕傲をやぶらん。10この悪き民はわが言を聴くことをこばみ 己の心の剛愎なるにしたがいて行み 且他の神に従いてこれにつかえ 之を拝す 彼等は此帯の用うるにたえざるが如くなるべし。11エホバいう帯の人の腰に附くがごとくわれイスラエルのすべての家とユダのすべての家を我に附かしめ 之を我民となし 名となし 誉となし 栄となさんとせり。然るに彼等はきかざりき。」（エレミヤ13・1～11）

イスラエルの民は宗教的な姦淫をしてしまった。その帯のことをもって、

「こんなに今は驕慢でもって腐ってしまった」

と。エホバは、

「帯の腰に付くが如くにイスラエルの民を自分に付かせて、本当にわが民となし名となし誉れとなし栄えとする」

と畳みかけて言っている。私たちはキリストの帯にならなくては。そして、エレミヤのこの言の通りになる。楽しいね。「麻の帯」というのは、ある意味において、謙虚を意味する。

「麻の縄」

ともいう。アッシジのフランシスが麻の縄を帯にしていた。謙虚の徴なんです。そうすると、キリストの僕となり誉れとなり栄えとなる。キリストの栄光となる。みんな帯を締めているな。帯、バンド、ベルトを締めていない人は一人もいない。昔は胴締めといった。

著作集の第十巻の「7月10日 麻帯」のところに書いてある。

「……この故事に倣ってアッシジのフランチェスコは托鉢僧として麻帯を結んでいた。彼はキリストの真相の一証者となった。麻帯は魂の相が無的謙虚な徴である。我々は存在そのものがキリストの麻帯となって、キリストに密着して歩きたいものである。パウロは「信真（アレーティア）を帯として」（エペソ6・14）と言っている。ヘブライ語で言えばエメツ、エムナー、アーメン、本然的全諾で、神という真を信受している

相を帯とすることである。かくて神・キリストという真を現ずる証者たらんことである。」

●愛のつな

もう一つ、大事なところが旧約にある。エレミヤと同じような、愛の預言者ホセアです。ホセア書11章、

「イスラエルの幼かりしとき我これを愛しぬ　我わが子をエジプトより呼びいだしたり。かれらは呼ばるるに随いていよいよその呼者に遠ざかり　且もろもろのバアルに犠牲をささげ

これはエジプトから出てきた後のことだ。バアルというのは、今のパレスティナに、カナンにいるところの他の神々のひとりです。

彫たる偶像に香を焚り。われエフライム

エフライムもイスラエルも同じこと。

に歩むことをおしえ　彼等をわが腕にのせて抱けり　然どかれらは我にいやされたるを知ず。われ人にもちいる索すなわち愛のつなをもて彼等をひけり　我がかれらを待うは軛をその腮より挙　のくるもののごとくにして　彼等に食物をあたえたり。」（ホセア11・1～4）

ここに「愛のつな」とある。綱でも帯でも縄でもいい。ヘブライ語も、二通りの言葉が使ってある。要するに「愛の帯」です。我々が「キリストの帯」というのは正に帯となると、キリストの愛が伝わるから、自然と愛の帯になってしまう。何事につけて、キリストの愛が魂の根底にあると、これが一切の秘訣です。

今のホセアのことは、第十巻の「5月20日 神の愛の綱」のところに書いてある。第十巻は、そういう意味でいろいろ、聖書の大事な所がピックアプしてありますから。

賀川豊彦は一日一冊づつ本を読んだという。一日一冊といっても、本の読み方もあるし、薄いのもあるし、厚いのもある。始めと中と終りとを読めば、大体わかる。それから、各頁で

「ああ、この辺は重要だ」

と、そういう読み方が段々できるようになる、本をたくさん読んでいると。そこは殊に、漢字が入っていると非常に楽です。非常に目につきやすいから。字が絵のようだから。全部かなだったら、読みにくくて困るよ。そこは、日本人は、漢字とかなとを混ぜてこういうのを作っているのだから、大したもんだよ。日本人というのはなかなか芸術的な民だ。